

## 適応指導教室「そだち」

適応指導教室「そだち」は、金沢市内の小中学校に在籍する主として心理的に不安定で家庭以外に居場所を失っている不登校児童生徒のための教室です。そこでは、安心できる居場所の中で自分のペースを取り戻し、様々な体験活動を通して社会性を身につけ、社会的自立及び再登校を援助するようにしています。

### 体験行事活動の紹介

単調になりがちな毎日の生活の中に無理のない行事を設定し、子どもたちに楽しい時間を過ごしてほしいと思っています。そして、リラックスした状態が他の子どもたちとのかかわりに変化をもたらすものであればよいと考えています。今年度は9月までに、カヌー体験教室、海釣り遠足、バーベキュー遠足、宿泊体験の4回の体験行事活動を行いました。

〈カヌー教室・5/21（月）〉

毎年恒例のカヌー教室です。からっと晴れた良い天気になりました。暑すぎるのでは？と心配しましたが河北潟から吹く風は心地よく、気持ちの良い1日となりました。おっかなびっくりカヌーに乗るスタッフをよそに、子どもたちはスイスイと乗りこなしていきます。思いっきり身体を動かした翌日、子どもたちは日焼けで身体が痛いと言い、スタッフは筋肉痛で身体が痛いと言っていました。



〈海釣り遠足・6/22（金）〉

雨続きの6月、前日の天気とはうってかわり遠足当日はしっかり晴れました。子どもたちは釣り糸を垂らし、魚がかかる期待に目を輝かせて海を

見つめていました。ただ、前日までの雨がひびいたのか魚は餌に食いついてくれません。「今日の夕食は釣った魚で！」と言う訳にはいかなかったようです。それでも、フグ、アイナメ、カニなどが釣れました。



〈宿泊体験・9/20（木）9/21（金）〉

秋晴れの過ごしやすい天候の中、上平村合掌の里へ行って来ました。合掌造りの宿の中、囲炉裏のある大きな部屋で談笑したりゲームをしたりと和やかにのんびり過ごしていました。普段会話を交わさない子同士で話をしたり、楽しそうに歌を歌ったりと、日常の表情とは違った一面を見ることができました。自然散策で拾った胡桃や楽しかった思い出など、たくさんのおみやげを持って帰ってきました。



### そだち連絡会

相談センターでは学校との連携を重視しています。昨年度は学期毎に一回ずつ実施し、年間3回の「そだち連絡会」を行うことができました。情報交換したり課題検討する中で、子どもに対する支援に関して先生方と今まで以上に連携をとれるようになったのではないかと考えています。今年度は、1学期と3学期の2回行う予定です。不登校の子どもたちに対する理解や支援について、先生方とともに力量を高めていきたいと考えています。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。（篠原）

（発行者）金沢市総合教育相談センター  
所長 澤井 弘  
〒920-0852 金沢市此花町2番7号  
TEL(224)0874 FAX(263)7830  
kyouiku\_so@city.kanazawa.ishikawa.jp

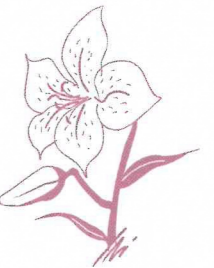
# 金沢市総合教育相談センターだより



金沢市少年補導運営協議会（7.17開催）

平成13年10月22日発行

## 親として 大人として ~できること なすべきこと~



金沢市総合教育相談センター 担当所長 澤田 秀樹

例年がない暑さだった夏もようやく終わり、各地で運動会が盛んに開かれています。グラウンド狭しと走り回る子どもたちの表情は、実に生き生きとしており、見ていると自然に笑みがこぼれます。

そんな子どもたちの笑顔を見ていると、すべての子どもたちがこのまま育ってほしいものだと思うのですが、現実には一時的に自分を見失い、人間形成の一番大事な時期を無為に過ごしている子どもたちがいます。

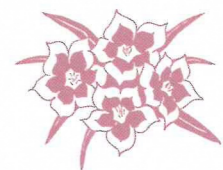
いったいなが彼らをしてそうさせたのでしょうか。以前と比べ有害な環境が増え、子どもにとって悪影響を及ぼしていることは否定できません。しかしそんな環境だからといって、すべての子どもが非行に走るわけではありません。子どもたちが非行に走るようになった原因にはいろいろあります。目の前で罵りあい、暴力を振るい、短絡的に別れてしまう親を見て、心に深く傷を負ってしまった子どもがいます。先生に裏切られたと感じ、あるいは友達とうまくいかないと感じたことが原因で、生活態度が乱れた子どももいます。

今年、長男が保育所の時にお世話になった先生と、二十年ぶりにお会いする機会がありました。先生から「〇〇くんは元気ですか？」と声をかけ

ていただいたとき、たくさんの子どもの接したであろうにもかかわらず、二十年前の息子のことを覚えていただいていたことに、とても感激しました。また息子が小学校でお世話になった先生は、「自分の子どもだと思って接します」とおっしゃるとても熱心な先生でした。若い未熟な親であった自分のことを顧みるとき、こうした立派な先生方の存在が、子どもに与えた影響力の大きさを感ぜずにはられません。

最後に二つのことに絞って、思うところを述べます。その一つは親のあり方です。親にとってわが子の将来の幸せに優先するものはそんなに多くはないと思います。家庭は親が子どもに遠慮して、言わなければいけないことをためらうところではないはずで、自信を持って子どもを叱ることの出来る親でありたいものです。

もう一つは大人のあり方です。先に述べた立派な先生がおられる反面、一部のだらしない大人が、この国の未来を担う大事な子どもたちに、身をもって悪い見本を示し、好ましくない影響を及ぼしています。私たち大人はそれぞれの立場で、子どもたちのためにしなければいけないことについてその責任を放棄することなく、できることを信ずるところに従って行動したいものです。



今年の4月から8月までの金沢市の補導状況をお知らせします。

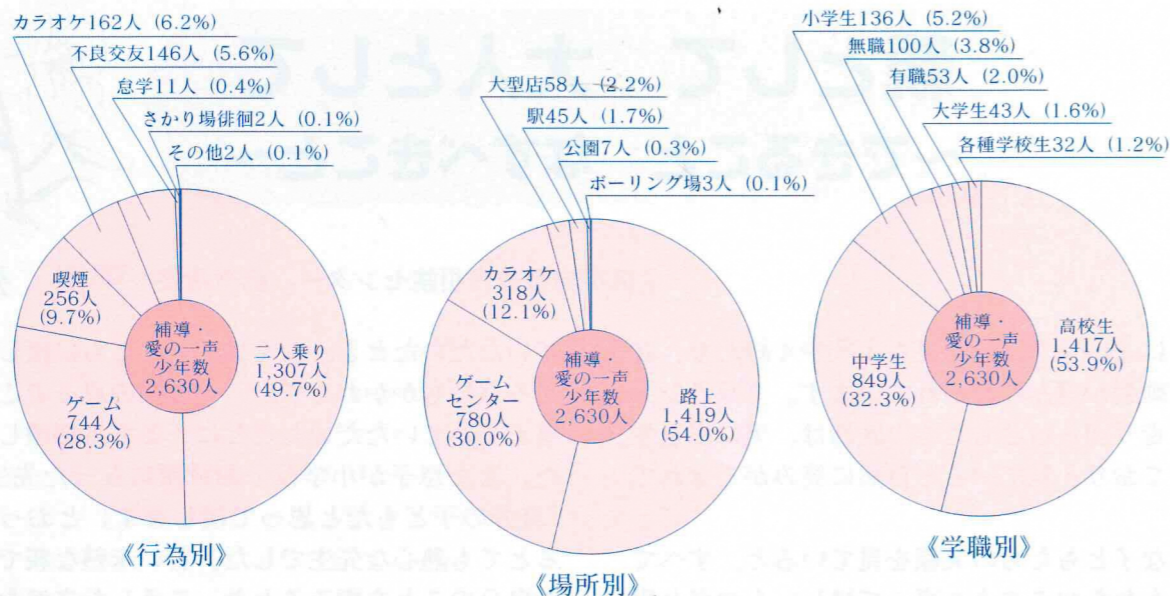
昨年の同時期と比べて大きな変化はなく、街頭では相変わらず高校生の自転車の二人乗りの姿が多く見受けられます。根気よく「声かけ」をしていきたいと思っています。

(1) 街頭補導状況

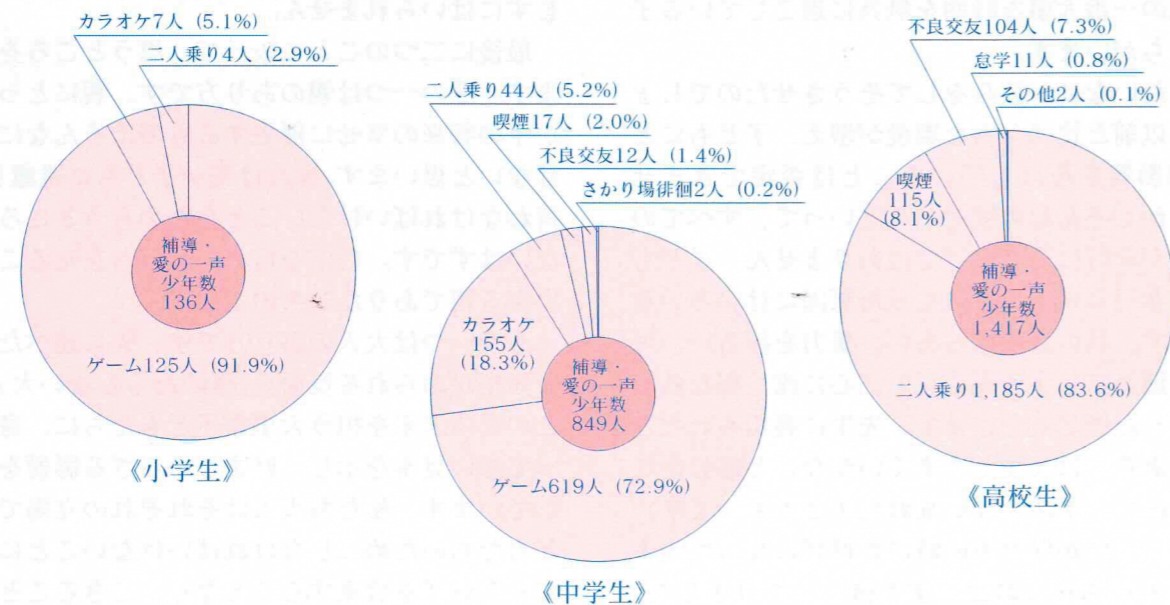
表中の( )は女子内数

	回数	補導員の従事数	補導少年数	「愛の一声」少年数	補導・愛の一声合計
午前	140回	328人	11 (6) 人	149 (90) 人	160 (96) 人
午後	254回	732人	110 (49) 人	2,094 (1,168) 人	2,204 (1,217) 人
薄暮	86回	236人	16 (8) 人	230 (106) 人	246 (114) 人
夜間	20回	66人	3 (0) 人	17 (13) 人	20 (13) 人
合計	500回	1,362人	140 (63) 人	2,490 (1,377) 人	2,630 (1,440) 人

(2) 補導・「愛の一声」少年の行為別・場所別・学職別の概況



(3) 小・中・高校生の行為別状況



前号では、当少年補導部門での活動紹介として街頭補導活動・環境浄化活動・地域連携活動・非行防止啓発活動の概要をお知らせしましたが、今回はその中の「街頭補導活動」について詳しく述べます。

当補導部門では毎年、小中高校の先生方や小中学校のPTAや育友会の皆さんをはじめ、各地域の公民館や婦人会等の各種団体の皆さん方等400余名の方に「少年補導員」の委嘱を行い、また、中・東・西各警察署が委嘱する「委嘱補導員」のご協力も頂き、当補導部門の「補導員」と一緒に「街頭補導活動」を行っています。

小中高校の先生方には、夕方5時からの「薄暮補導」を担当していただいています。従来は片町・香林坊・堅町等繁華街のみの巡回でしたが、近年、郊外に大型店舗やゲーム場・カラオケボックス等の進出が著しく、今年から新たに、「地域

の巡回も始めました。これは近隣の小中高校2～3校ずつを1グループとし、それぞれの学校（地域）の実情に応じた場所を巡回するものです。

週末の金曜日午後7時から、「夜間補導」を実施しています。担当は、小中学校のPTAや育友会、各種団体の「少年補導員」の方々と警察署の「委嘱補導員」の方々と、各警察署管内の巡回をしていただいています。また、土曜日の午後2時からの「昼間」には、上記「少年補導員」の皆さんで、繁華街等の巡回をお願いしています。

なお、平日の午後3時30分からは、「小中学校校外指導連盟」及び「金沢地区高等学校生徒指導連絡協議会」の先生方が、繁華街の補導活動を担ってくれています。

「街頭補導活動」は多くの方々のご協力により実施されていますが、青少年の健全育成のため、今後とも変わらぬご支援の程、お願い致します。

(補導員A)



街頭補導活動の実際から

「愛の一声」として伝えたいこと

今年度から補導活動に携わることになりました。学校現場での生徒指導とは異なり、不特定多数の小中高校生や有・無職の少年たちが対象となります。補導の対象となる少年たちの行為の多くは喫煙行為、そしてルール違反として自転車の二人乗り、また小中学生の単独もしくはグループでのゲームセンターやカラオケボックスへの入場です。また若干ですが、飲酒や不良交友が補導の対象になる場合もあります。補導活動の第一歩は、まず声をかけることから始まります。きちんと身

分を明かして、やっている行為、やった行為について法的には認められていないことや、将来ある大切な身を損なう原因になることなどを話しながら反省を促すようにしており、叱責めいた言動は一切取らないように十分に注意をしております。このような声かけを私たちは「愛の一声」と称しています。21世紀を担う少年たちの健全育成の一助にならんことを密かに思いながら日々補導活動にあたっています。

(補導員B)

ある薄暮補導より ～保護者からの電話が伝えてくれたもの～



2学期が始まってから1週間が過ぎた頃、いつものように薄暮補導に出発。台風が近づいていることもあり、天候は雨。こんな日はさすがに子どもたちも真っ直ぐ家に帰っているだろうと、ゆっくり車を走らせていた時、高校生と見られる4、5人のグループが家の軒下で雨宿りをしていました。その中の数人が喫煙中でした。坊主頭にジャージの上下。首には太いネックレスをつけている少年と話をすることができました。外見のつっぱって背伸びをしている姿とは大きく違い素直な少年です。

注意をすると「親の世間体だけで高校へ行っている」と言います。その後いろいろと話をすると「なんとなく分かった」と返事が……。親とゆっくりと話をするように諭し別れました。

翌日、早々に保護者より「補導されたことで、子どもと話をすることができました」という電話がありました。子どもの行為に戸惑いながらも、何とかしたいと思う親の気持ちにほっとするものを感じました。その親心が子どもに伝わればと思います。

(補導員C)

## 補導活動で心がけていること

私達の仕事では、“忍耐強く” 巡視することが必要です。

「いつものように何事もなく平穏な街中だ」と安心して巡視をしていた夏休み明けの1日目、あるビルに入ると、1人の男の子が煙草を吸いながらベンチに座っていました。

こちらをキャッチした様子で煙草を灰皿に入れ、立って行こうとしました。

補導員 「年齢は？」

少年 「二十歳！」

補導員 「何年生まれなの？」

少年 「2001……引く20や！」

補導員 「干支は何？」

少年 「それ何や？」

補導員 「ほら、へびとかうさぎとかねずみとか牛とかあるでしょう。何の干支かなあって聞いているんよ」

少年 「分からん。知らん」

足早に立ち去ろうとします。17、8歳に見えました。

補導員 「ちょっと待って、まだ早いよ」

少年 「高校行っとらんもん」

と言いながら、エスカレーターに乗って去ってしまいました。もう少し話を聞きたかったのに……高校を辞めたように感じましたが、仕事はしていないのでしょうか。悪いと思ったから灰皿に吸い殻を入れたのでしょうか。

その子がより良くなりますように、と願うひとときでした。

私達の補導活動は、どんな人をも先ず受け入れてあげること（受容性）が大切だと思います。

人間尊重が基本であり、出会う子供達に、共感的で理解的な気持ちをもって接するように、暖かく信頼できる人間関係を保持することを常に心がけている毎日です。（補導員D）

## 明日のために

学校は一人一人の子どもにとって楽しく学び、生き生きと活動できる場であってほしいと願っています。そのためには、すべての子どもたちの人格のよりよい発達を目指す生徒指導の機能を学校生活のすべての場で十分作用させていくことが必要と思われれます。

学校の体制として、「授業の充実・係活動や部活動における活動の場の提供」を第一に考え、子どもたちに自らの存在感を持たせ、また子どもたちそれぞれの長所や良さを伸ばしてやれる体制を組みたいと考えます。

いわゆる「教育相談的対応」に対する現状をみると、ある問題行動を引き起こした子どもに対して、共感的な態度で接している先生を軽視する傾向が見受けられます。残念ながら、「悪いもの」は排除すべきであるという意見が肯定されるときがあるようです。教育相談的手法による対応がいつでも生徒指導にとって最良とは言えないにしても、常に考慮する必要はあるものと思われれます。

子どもたちの結果的に現れる「行動」や「言葉」だけにとらわれていると、その子の本質や背景を理解することが出来ないかもしれません。結果として現れている事実は事実として受けとめるとともに、そこから見え隠れしているその子どもの「気持ち」や「状況」を十分に把握するよう努力したいものです。その過程を通して、その子どもが自分の良い部分を探し、見つけ出し、必要に応じて子どもと一緒に創りあげていきたいものです。

すべての子どもたちには充分ですばらしい可能性があります。あきらめないうで、ねばり強く生徒指導（子どもたちが自己成長の努力を続けられるための支援）にあたっていきたいものです。子どもたちの良さが発揮されるのは明日かもしれないのですから。（竹内）

## 夏の研修会より

夏期休業期間中に7講座で延べ10日の教育相談関連の研修会が行われました。暑い中、参加された先生方の熱心な姿が多く見られました。

研修会のうち、二つの講演会から内容の一部をお知らせします。

### 「ピア・サポートではじめる学校づくり」

国立教育政策研究所 滝 充  
ピア・サポートジャパン 松田満理子

いじめや不登校、暴力行為などの生徒指導上の問題の背景には対人関係のストレスが存在する。対人関係のストレスを解消するために、今人間関係づくりの支援が求められている。その方法として「ピア・サポートプログラム」が考えられた。ピア・サポート（peer・support）は「子ども同士（仲間）の支え合い（育ち合い）」ということであり、社会性が未熟・未発達で対人関係をうまく築けない子どもたちのために、子どもたちが互いに関わり合うことで対人関係能力を育てるものである。

このプログラムは、子どもの「社会性の基礎」を補うことを目的とした体験的トレーニング（領域1）と、そこでの経験や気づきを活かして子どもが主体となってお世話する活動（領域2）との二つで成り立っている。

領域1では、ゲーム等の活動を通して人と関わることの楽しさを体験させる。そして領域2では、年上の子が年下の子をお世話する活動を通して子どもたちに自己有用感を獲得させる。そのためには、異学年の間でのお世話活動の場を学校全体の協力のもとに作っていくことが必要で、とくに、6年生（中学では3年生）を育てる活動であることを忘れてはならない。

また、この活動を行うときは、主体は子どもであって、教師が「この時間で子どもを変えたい」「自分の指導で子どもを変えたい」という発想を捨てること。そして、学校全体で取り組み、6年（3年）がかりで子どもを育てるという発想を持つことが大切である。そのような意味において、このプログラムは学校づくりのプログラムでもある。



### 「特別な教育的ニーズのある児童生徒の援助」

国立特殊教育総合研究所 海津亜希子

特別な教育的ニーズを必要とする子どもたちには、LD（学習障害）・自閉症・ADHD（注意欠陥／多動性障害）等の子どもがいる。

LD（学習障害）は全般的な知能の遅れはなく、認知（情報処理）の障害であり、その認知の過程がうまく機能しないために様々な困難を示す。例えば、聴覚的な情報処理が困難な場合、先生の話す声と周りの友だちの声やその他の周囲の様々な音がみんな同じ強さに聞こえてしまう。そのため、先生の説明や指示が聞き取りにくくなり、指示通り動けなかったり、説明を理解できないことがある。そこで、LD児の指導は子どもの特徴を知り、その特徴に応じて指導目標や配慮点を明確にすることが大切である。

特別な指導の配慮としては、聴覚優位または視覚優位、継次処理または同時処理など、子どもの得意な認知処理に応じた指導を行うことが考えられる。また、一般的な指導配慮としては、能動的な学習にすること、目標を少しがんばればできるものにすること、良い行動をしているときに肯定的な声かけをすることなどがある。これらのことはLD児だけでなく他の多くの子どもたちにも有効な指導である。

ADHDの子どもは注意が持続しなかったり、じっとしていることが困難だったり、思い立ったらすぐに行動してしまうなどの行動の問題が中心となる。

学級での支援のポイントとしては、指示はなるべく具体的に短くし視覚的な提示も併用する、集中できる時間が短いので1時限の中に活動をいくつか入れる、板書は少ない文字数で方向を決めて注意を集中させる、ノートに書くときは罫線やますを利用して書く場所をはっきりさせるなど、その子の状況を十分に理解した指導を行うことが重要である。

子どもたちにとって、自分の力を発揮できる場があること、そしてそこで成就体験を積むことがとても大切である。（鈴木）